

鳥肌が立つほどすごい演奏を聴いて思ったこと*

日本の英才教育に関する覚書

黒田 航

Revised on 2010/02/27, 2009/07/05, 06, 07, 12, 08/13

Created on 2009/07/05

はじめに

私は (we)blog は書かない¹。なぜか? 私は匿名の文章を書くのは好きじゃない。なぜ? 匿名で文章が書け、それに編集が入らないという状態では、読む価値のない下らないことを書く誘惑に負けてしまう可能性があるからだ。匿名じゃないblogを書けばいいって? いや、コメントバックにつきあうのがかなり面倒そうだし、それよりも、blogのような軽い書き物であっても「何かを書いてすっきりする」のは研究によくない影響があると知っているからだ。何かを書くなから、ちゃんと書く方がよい。WWWを有益な共有資産にしたいなら、もっと多くの人が「ちゃんと考えたこと」を「他人が読んでも気分が悪くならないような文体」で書くべきだ²。もう一つの懸念は、匿名の文章では不平不満の吐露を避けるのが難しくなることだ。私はそういう文章を書くのが生理的に好きではない。私生活をネタにした語り元々好きじゃないなど、blogを書かない理由は他にも幾つかが挙げられるが、それをいちいち云々する必要はないだろう。要

*出口雅也から戴いたこのエッセイへの意見に感謝する。

¹従って、この世のどこかに私のblogがないかと思って探すのは明白な時間のムダであるので、止めた方がいい。

²そういう意味では、2chのようなWWWの「暗黒面」には加担しないに限る。

するに私は「blogは書かない方がよい」と思い、そうしているのである³。

ただ、そういう「縛り」をかけておくと、たまに困ったことも起きる。ちゃんとした文書では書きにくい経験をした時に文章にする機会を失いやすく、その結果、情報の共有が起きにくいことだ。blogの良いところ—それは上でも触れたように、悪いところと表裏一体なのであるが—は、何でも気軽に書け、編集と検閲の段階がないところだ。それは文章を書くのを習慣にしていない人にとっては有益な情報発信の手段であり、生活の武器にもなるだろう。だが、文章を書くのを仕事にしている人—研究者はその一種だと思うが—の場合は、まったく話が別だ。blogを書くのに忙しく、研究論文を書かなくなったら、それこそ本末転倒だろう⁴。

³ただ、何か「絶対に許せない悪」を告発するための手段としてblogを利用することは将来的にはありえないとは言えない。

⁴研究者が自分のblogを通じて(研究コミュニティ内ではなく)世間で有名になるというのはインターネット時代の「新しい宣伝スタイルとしてはアリ」なのだろう。だが、私はそれをしたいとは思わない。インタラクションには良い面ばかりが付随するとは言えない。最悪の面を一つ挙げればインタラクションでは話し手が自分でも知らないうちに聞き手の歓心を買うような言動をしないようにする—要するに支持者に阿るような態度を取らないようにする—のが極めて難しくなる。これは人気が出れば出るほど制御しがたくなる。そうなってしまったら、自律した研究をすることが難しくなるというのが私の今の考えである。

前置きが長くなったが、このエッセイの内容は研究には関係がない—少なくとも表面的には言語学とまったく関係がない。とはいえ、高等教育にはかなり関係があると思う。

起

私は縁あって、2004年度と2005年度、京都市立芸術大学(以下、京芸大と略す)で英語の非常勤講師を務めていた。意味タグづけの研究と作業に専念するためにその仕事は止めてしまっていたが、今でも定期公演の案内が来る。京芸大は毎年2回、7月の頭⁵と2月中頃の定期演奏会を開いている。場所はいつでも北山にある京都市コンサートホールだ。半年に一度、この演奏会を聞きに行くのは、私の数少ない楽しみの一つだ。このコンサートは演奏者が全員学生とは思えないほど芸術性が高い。

今日は第132回の定期演奏会だった⁶。演目は(1) C. M. von Weber の「魔弾の射手」序曲、(2) P. I. Tchaikovsky のヴァイオリン協奏曲ニ長調、(3) A. Dvořák の交響曲 No.9 ホ単調「新世界より」の三曲だった。今回の演目には、正直に言うともあまり期待はしていなかった。「魔弾の射手」序曲は元々聴いたことがなかったし、他の演目もどちらかということ「くどい」曲だ⁷。

まず von Weber の「魔弾の射手」序曲を聴く。私はこの曲をは聴いたのは初めてだったのだが、

⁵7月の演奏会は、時々自分の誕生日に重なるので、自主的誕生日祝いをかこつけるに都合がよい。

⁶去年、一昨年の演奏会では私が英語を教えた学生が数多く演奏者として出演していたが、今年は留年[?]した学生を除いて、私の知っている学生の名前は演奏者名簿にはみづからなかった。時間の経つのは早いものだ。

⁷「新世界より」は確かにカッコいい曲だが、うるさいので好きではない。私は実を言うと、全般的に交響曲は室内楽に較べて好きではない。特に編成の大きさは交響曲は音が多過ぎる。とはいえ、これは完全に好みの問題だ。

印象では何だかとりとめのない曲だという感じだった。増井信貴(ますいのぶたか)指揮の演奏は決して悪くはないが、音楽は「まあ、こんなもんか」と思った。今までの演奏会では指揮者の増井は定期演奏会では毎回、固定されていない学生演奏者をうまくまとめるだけでなく、現代的ですばらしい解釈を示してくれているので信頼できる(彼は知名度こそ高くはないが、一流の指揮者だと思う)。前回の演奏会での J. Brahms の Symphony No. 4 と、その前の演奏会での L. van Beethoven の Symphony No. 7 は Carlos Kleiber と Wiener Philharmoniker との名演奏を思わせる見事な解釈だった。増井が指揮する学生オーケストラは十分すぎるほど芸術的な演奏を披露してくれるので、彼が指揮を務める京芸大の定期演奏会に行くのは、いつも楽しみだ。

次の Tchaikovsky のヴァイオリン協奏曲は今日の目玉だった。

承

ヴァイオリン独奏は東珠子(あずまたまこ)という人だ。この人、1987年の生まれだそうだから、まだ22歳だ。今は京芸大の4年生だそうだが(彼女は私が英語を教えていた頃は、まだ京芸大に入学していなかった)。

独奏が始まって、私はぶったまげた: これは尋常じゃない。この、Yuval Yaron 顔負けの表現力をもった演奏が、本当に22歳の日本人学生演奏家の演奏か?!?!? 信じられん—演奏を聴いて、心の底から驚いたのはこれが生まれて初めてのことだと思う。演奏を聴いて「鳥肌が立つほどすごい」というのは、マンガに出てきそうな表現であるが、私は今日、生まれて初めてそういう体験をした。

生演奏の方が録音モノよりすばらしいというのは、よくあることだ。だが、一流の演奏家の生演奏がいつもすばしかかという、そうでもない。学生時代に聴いた Ivo Pogorelich の大阪でのコンサートも、(Berlin Philharmoniker の首席指揮者に就任する以前で、Sir が付く以前の) Simon Rattle が City of Birmingham Orchestra を指揮した大阪講演で G. Mahler の Symphony No. 9 in D を聴いた時にも、USCD に留学している時に Emerson String Quartet が USCD の音楽学部で行なった D. Shostakovich の String Quartet No.11 を聴いた時にも、今日の東の演奏を聴いた時ほどには感動しなかった。

私は小さい頃からクラシック音楽好きで、小学生の頃には、すでに父親が集めていた LP を片っ端から聴いていた⁸し、大学に入り立ててで自活のための金銭感覚が未発達だった頃には、仕送りを全部 LP につぎ込んで生活費がなくなり、友人の家でご飯をめぐんでもらった経験がある⁹。特に好きな曲 (e.g., Gustav Mahler の Symphony No. 9 in D) は、手に入るすべての盤を集めて聴き較べたりしたので、今までの人生で、かなりの数の演奏を耳にしてきた。だから、私はそれなりに「耳が肥えている」ことを自負しているし、すぐれた演奏家はちょっと聴いただけで直観的にわかる¹⁰。

⁸オヤジは Deutsch Gramophone と EMI がお気に入りのレーベルだったようで、多くのレコードを多くもっていたが、Philips や Decca/London や RCA はほとんどなかった。その後、色々な演奏を聴いてわかったのだが、私の好きな演奏家は Philips 録音を残していることが多い。おそらくそれぞれのレコード会社には独自のプロデュースの方針や新人採用の哲学があつてそうなのだろう。

⁹これにはかなり反省し、その後はそのような事態は起っていない。因みに、その友人は今イタリア文学の専門家になっている。

¹⁰例えば大学生の時に Ivo Pogorelich は聴いた瞬間に「一聴」で「これはすごい」とわかった。それはメディアが彼を大々的に取り上げるよりも前の話だ。Scott Ross の演奏を知った時にも、それが前人未到の境地の演奏であるこ

今日の演奏会で聴いた東珠子のヴァイオリン演奏は、音楽の種類を問わず、私が聴いたきたうちで、もっともすばらしい演奏に属する。それが自分が数年前に教えていた芸術大学の学生の演奏だというのは、なおのこと驚きだ。それと同時に、本当に世界に通用するような人材が自分の身の回りにいるという事実に正直に感動した。

とはいえ、Tchaikovsky の協奏曲で残念だった点もある。東の演奏は確実に世界のレベルにあったと思うが、いかんせんオーケストラの演奏のレベルはそうではなかった。Tchaikovksy に続く Dvořak の演奏を聴いた限りでは、京芸大の学生オーケストラはそれなりの演奏レベルにあるのはまちがいないと思うが、東の演奏のレベルとは明らかに落差があった。実際、東の演奏はオーケストラとのかけ合いのところ (要するに concerto の concerto たる本質的な部分) では、完全に浮いてしまっていた—印象ではオーケストラが置いて行かれていた感じだった。とはいえ、全部のかけ合いがダメだったわけではない。フルートとのかけあいはかなりよかった。こう言うのは気の毒だと思うが、全体的に見て、Tchaikovksy の協奏曲の演奏ではホルンの力不足が目立った。

「新世界より」は自分の好みの曲でない割には面白く聴けた (しかし、やはりうるさいとは思った。こう言うのは熱演をしてくれた演奏者の皆さんには失礼だと思うのだが、好みというはあるので、仕方がない)。面白く感じたのは、演奏者と指揮者の熱意に好感がもてたからだと思う (録音で聴いた「新世界より」を面白いと感じたことは一度もない)。非常に満足な演奏会

とは一瞬でわかった。とはいえ、G. Gould は例外で、彼の Goldberg variations を聴いても、しばらくはピンと来なかった。最初に聴いたのが新盤だったせいかも知れない。

だった¹¹。

転

東の演奏に素直に感動し、若い日本人の躍進を頼もしく思う一方で、私は非常に悲しくも感じた。私が関与している言語の研究の世界では、こういう世界レベルの研究者が育つことはありえないと思うと、私は無性に悲しくなってきた—少なくとも、今のままでは100年経ってもそういうことは絶対に起きないと私は確信する。今日のスターの東に限らず、優秀な演奏家になるのはものすごく大変なことなのだ。すぐれた音楽家になった人で英才教育を受けていない人は皆無に等しい¹²。

¹¹ ついでなので、もう一つ blog っぽい内容を追加しておくことにする。

今日は新進演奏家の発見の次いでに、もう一つ良いことがあった。私はコンサートが終わるとホールの近くの『進進堂』で遅い昼か早い夕食を取る(いつも、だいたい4:30頃だ)。そこで頼んだ赤のグラスワインが予期せずとてもおいしかったので、店員に銘柄を尋ねると「“negro amaro rosso”という銘柄だ」という答え。その段階ではどういう品種かはわからなかったが、ボトル一本1980円という安価なワインだ。それをボトル一本購入し、家に戻ってネットで“Negroamaro”の素性を調べると、これはイタリアのSalento州特産の品種ということが判明。今日は、良い演奏家に出合ったのと同じく、今までは聞いたことがなかった自分好みのブドウに巡り合ったとても運の良い日だった。因みは私は赤ワインではShiraz(フランス名はSyrah)が大好きだ(白で好きなのはSauternesかRiesling。だが、Sauternesは決して安くはない(笑))。NegroamaroはShirazとどことなく共通性のある味がする。

¹² その一端を、私はひょんな機会から非常勤講師をしている期間に垣間見た。私は英作文を指導する際、「英作文の基本は真似事です。うまく真似ればそれでよいんです。それは演奏の上達法と同じです」と説明し、日英対訳データ <http://www2.nict.go.jp/x/x161/members/mutiyama/align/index.html> を使った英作文の指導を試そうとした。その時に生徒に尋ねて驚いたのは、「パソコンを使ったことがない」という学生の割合が私の予想を超えて多かった—クラスの生徒の半数近くが自宅にパソコンがないと答えたことだった。私は同時期、京都外国語短期大学でも英語を教えていたが、パソコンへの親しみ度は明らかに京都外大の短大の学生の方が上だった。

音楽家は確かに非常に極端な場合だが、傑出した人材が世に出るための必要条件の一つは英才教育である¹³。実際、音楽家の同じことが数学や物理の世界でも言える。日本の数学や物理学が、何人かのFields賞・Nobel賞受賞者を出すレベル、つまり世界のトップレベルにあるのは、それなりにうまく行っている英才教育と競争原理の帰結である¹⁴。

結

私は、研究者がすぐれた研究によって人に感動を与えるのは、すぐれた演奏家がすぐれた演奏によって人に感動を与えることと同じだと考えている。この見解には理系の研究者なら、多くの場合に共感してくれると思う。

演奏家はすぐれた演奏ができるために研鑽を積んでいる—それができない者はすぐれた演奏者にはなれない。本当にすぐれた演奏家の活動は無私無欲に近い—彼らは美と人への奉仕者なのである。

それと同じく、多くの理系の研究分野では、研

た。はじめはこのことに呆れたが、後になって「英才教育の副作用としては、それもアリかな」と考えを変えた。一芸に秀でる人には知らないことがあってもいい—いや、一芸に秀でるためには、犠牲にしなければならない楽や喜びもあるかも知れないと思ったのである。

¹³ 日本では、どうも英才教育というものが誤ったイメージで捉えられているように思う。英才教育というのは、子供を無理やり学習塾に行かせることではない。英才教育の基本は、子供が興味をもったことは何でも、好きなだけやらせる—場合によっては義務教育のカリキュラムを無視してもそうする—ということだ。これは子供が関心をもたないことは何一つ強要しないということを含む。つまり、英才教育というのは、本質的にリスクの高い「賭け」である。

¹⁴ もちろん、それには暗黒面もある。例えば京大の物理学科は「優秀な頭脳の墓場」と呼ばれている。それは「一般的な基準で見れば優秀極まりない頭脳の持ち主でも、ここでは“凡人”であり、研究者としての成功が約束されていない」という意味だ。

研究者はすぐれた研究ができるために研鑽を積んでいる — それができない者はすぐれた研究者にはなれない．本当にすぐれた研究者の活動は無私無欲に近い — 彼らは真実と人への奉仕者なのである．実際に、数学や物理の研究者の生き方の理想はすぐれた演奏家のそれに近い¹⁵．

だが、こういうことは文系の研究にはまったく期待できない．私が見聞きする限りでは、文系の研究者はすぐれた研究ができるための研鑽を滅多に積まない — 従って、すぐれた研究者は滅多にいない．文系の研究者の活動は我欲と私怨の固まりだ — 彼らの多くは真実と人への冒読者である．

追記

出口雅也からの指摘で、ここまで読んで心を痛めた文系研究者の読者は良心のある研究者であり、私の批判の対象ではないということは明記しておく必要があると気づいた．私が本当に批判したいと思っているのは、私の「文系研究者の多くが真実と人への冒読者である」という批判を読んで悲しむ代わりに、憤慨するような人々である．私は断言する：そういう人々が人文系の研究を墮落させている人たちである．

私が文系の研究者の多くが真実の冒読者だと言うのは、彼らが「真理は存在しない」と言い、それに基づいて主観性を無条件に正当化するからだ¹⁶．相対性理論で運動速度の異なる観察者間に共通の同時性が存在しないことがわかる

¹⁵しかし、若い研究者の場合は少し事情が違う．それは[3]などを読めば明らかだ．

¹⁶これと関連して、日本ではどういうわけか、人文系研究者の多くが「反知性主義」の姿勢を取る．率直に言って、私はこの傾向が大嫌いだ．それはまるで音楽演奏家が自分がどれほど練習しないで演奏ができるのかを自慢しているようなものだ．

ことから考えて、真実が単一でないということはあることだ．だが、それが意味するのは「真実の個数が観測条件によって複数個ありえる」ということであって、「真実の個数がゼロ個である」ということではない¹⁷．真実が複数個存在する場合、それらを統一的に説明することが一般に可能なかわからない．だが、それが不可能だと明言して、そのための努力を放棄することは、すでに科学の可能性を放棄することではないのか？

真理が価値から独立していないという説には納得できる部分もある．科学的な真理の追求がうまく行っているのは、科学的探求が、通常なら価値観の対立から発生する利害対立が例外的に無視できるような活動だからだという可能性もないとは言えない．だが、それが仮に本当だとしても、利害によって自由に真理を決めてよいということは意味しないと私は思う．真理を利害によって決める自由が許される世界は非常に荒んだ世界である．そこには正義というものが成立しないからだ．

研鑽を積まないことがよくないことだわかっているとしても、研鑽を積むのに具体的にはどうすればよいのか？ 確かに、文系の研究の場合に研鑽が具体的に何であるかを言うのは難しい．だが、一部からの反論を覚悟の上で言うと、数理モデルに対する慣れ親しみは文系と言えども不可欠だと私は思う．正直なところ、数理モデルを利用しないで科学を实践するのは不可能だ．だから、文系研究者と言えども、最終的には数理モデルからは逃れられないというのが私の持論だ．数理モデルが要らないのは、研究の極々浅いレベルである．もし数理モデルに恐怖感や

¹⁷少なくとも、相対性理論では観測地の複数性は理論によって統一的に説明される．そのような努力を文系の研究が行なっていけない理由はない．

敵対心をもつようなら，その段階ですぐれた研究者としては失格ではないかと思う．

ただし，ここで次のことは言っておきたい．大学進学の際に文系を選んだ学生は基本的に理系課目—特に数学が嫌いだからそうなったのだと思うが，そうなった原因はほとんどの場合，学生自身の能力の不足ではない．本当の原因は多くの場合，数学を教えるのが上手ではない数学教師によって，数学と不幸な出会い方をさせられてしまったことにある¹⁸．特に良くないのが数学教育で強要される「証明」である．この辺のことは[5]でうまく解説されてあるので，関心のある読者には一読を勧める¹⁹．

数学的思考力に劣らず重要なのは，批判的思考である．私はあいにく，自信をもって勧められるほど良い批判的思考法の入門書を知らないのだが，私が知っている限りでは，[2]からは，多くの事例を通じて実践的なことが学べるのではないかと思う．批判的思考の本質は肯定証拠を信用しすぎないことである．実際，肯定証拠がどんなに積み重ねられても，それは事実の証明ではないということを理解するのが批判的思考の始まりである．

批判的思考を，その欠如から透かして見るというアプローチもありえる．その場合には[1]が参考になるだろう．

¹⁸ 数学教師の大半は数学科の出身であり，数学者である．ここにパラドックスがある．当然のことだが，彼らは人に較べて数学がよくできる．だが，別の見方をすると，全員とは言わないが，彼らの多くは数学ができない人の気持ちがわからない可能性が高い．そういう人が中学や高校の入門レベルの数学を教えると，悲惨なことが起こるのは想像に難くない．

¹⁹ 小島氏にはこの他にも[4]のような野心的な著書がある．彼の著作を知ったのは最近のことだが，幾つかの本を読んで私は，彼の目標が学校教育の場で数学と不幸な出会い方をした多くの「不運」な人に，数学の本当の魅力に気づいてもらい，実生活に活かしてもらおうことだと理解した．そういう意味では，ここで彼の著作を勧めるのは，意味のあることだと思う．

参考文献

- [1] T. ギロビッチ. 人間この信じやすきもの: 迷信・誤信はどうして生まれるか. 新曜社, 1993. [Thomas Gilovich (1993). *How We Know What Isn't So: The Fallibility of Human Reason in Everyday Life*, Free Press. の翻訳].
- [2] N. N. タレブ. ブラック・スワン: 不確実性とリスクの本質 (上, 下). ダイヤモンド社, 2009. [Taleb, Nassim Nicholas (2007). *The Black Swan: The Impact of the Highly Improbable*. Random House. の翻訳].
- [3] ジェームズ D. ワトソン. 二重らせん. 講談社, 1986. [James D. Watson (1969). *The Double Helix: A Personal Account of the Discovery of the Structure of DNA*, Signet. の翻訳].
- [4] 小島 寛之. 文系のための数学教室. 講談社, 2004.
- [5] 小島 寛之. 数学でつまづくのはなぜか. 講談社, 2008.